

【 復活のトロパリ 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、
 天使 軍 爾 墓 現

ばんぺいしせしもののごとし、マリヤはか
 番兵 死 者 如 墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね
 立 爾 潔 體 尋

たあり。なんぢはぢごくにいざなわれず
 爾 地 獄 誘

して、ぢごくをとりこにし、いのちをた賜
 地 獄 虜 生 命 賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。
 者 處 女 逢 給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは
 死 復 活 主 光 榮

なんぢにきいす。
 爾 歸

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
 神 撰 笛 愛
 にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光
 しょおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亜使徒主教聖
 よ、なんぢのぼくぐんのため、および
 爾 羊 群 爲 及
 ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
 全世界 爲 生 命 賜 聖
 さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給 え。

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこおとせいしんにき
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸
 す、
 せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
 成 聖 者 亜使徒聖 我
 くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受
 しに、なんぢははじめわがくににおいておの
 爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
 外 來 者 知
 ひかりとあたたかきをながし、なんちのて
 光 暖 流 爾 敵
 きをぞくしんのことなあし、かれらにか
 屬 神 子 爲 彼 等 神
 みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩 寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 爲 祈
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べよ。

【 復活のコンダク 第6調 】

いまもいつうもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世
 いのちのげんいたるハリストスカみはいのちを
 生 命 原 因 神 生 命
 ほどこすてをもつてしせしものをくらきた
 施 手 以 死 者 暗 谷

によりいだし、ふくかつをじんるいに
出 復 活 人 類

たまえり、しゅうじんのきゅうせ いしゅ、ふ
賜 衆 人 救 世 主 復

くかつといのち、およびしゅうじんのかみな
活 生 命 及 衆 人 神

ればなあり。

司祭) (黙誦： ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしょう} 聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} ヘルヴィムより讚榮せられ、^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} 悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行^たう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} る祭壇の光榮の前に立ち、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ} 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世
に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇 毅 、 聖 なる

じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 の 者 我 等 を 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇 毅 、 聖

な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 の 者 我 等 を 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇 毅

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 なる 常 生 の 者 我 等 を 憐

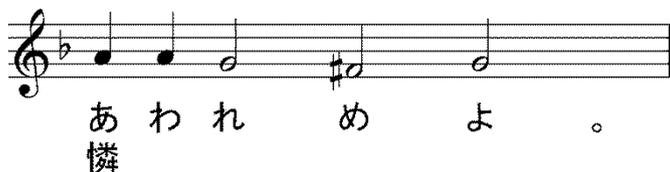
れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せ い しん
 光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 歸 今 も 何 時 も 世 世 に 、 ア ミ ン。

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 なる 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇

き 毅 、 せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 、 聖 なる 常 生 の 者 我 等 を



あわれめよ。
憐

司祭) (黙誦: ^{しゅ な よ き もの あが ほ}主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、^{ぎ もの なんぢ そのくに}ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
^{こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ}の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

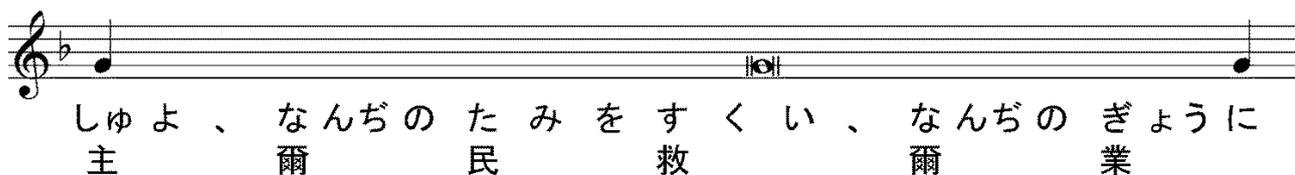
【 プロキメン 主日第6調 】

司祭) ^{つつし き しゅうじん へいあん}慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) ^{なんぢ しん}爾の神にも、

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{しゅ なんぢ たみ すく なんぢ ぎょう ふく くだ たま}プロキメン、主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、

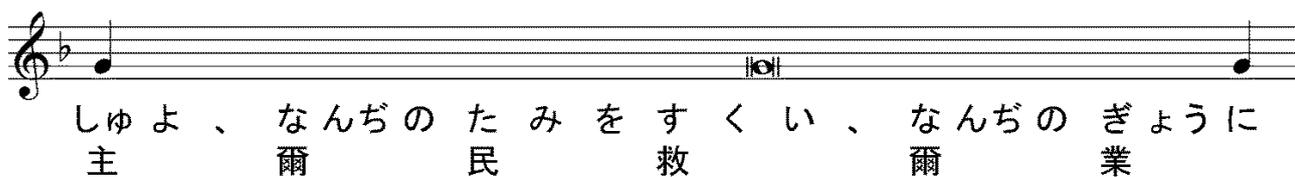


しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
主 爾 民 救 爾 業



ふくをくだしたまあえ。
福 降 給

誦經) ^{しゅ われなんぢ よ われ かため わ ため もだ なか}主よ、我爾に呼ぶ、我の防固よ、我が爲に黙す母れ、



しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
主 爾 民 救 爾 業



ふくをくだしたまあえ。
福 降 給

誦經) ^{しゅ なんぢ たみ すく}主よ、爾の民を救い、



なんぢのぎょうにふくをくだしたまあえ。
爾 業 福 降 給

【 アポストロス 使徒經 176 端 コリント後書4章6~15節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがコリンフ人に達する後書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、暗より光の照ることを命ぜし神は、我等の心を照せり、イイススハリ

ストスの面にある神の光榮を知る知識を以て我等を輝さん爲なり。然れども我等は

此の寶を土の器に藏む、莫大の能が神に由りて、我等に由らざらん爲なり。我等四方

より患難を受くれども、窮せず、險しき境に處れども、望を失わず、窘逐せらるれ

ども、棄てられず、倒さるれども、亡びず。常に身に主イイススの死の状を佩ぶ、イイス

スの生命も我等の身に顯れん爲なり。蓋我等生ける者は、常にイイススの爲に死に付さる、

イイススの生命も我等の死すべき肉體に顯れん爲なり。是くの如く死は我等の中に行い、

生命は爾等の中に行うなり。然れども録して、我信ず、故に言えりと、あるが如く、我

等も此くの如き信仰の神を有ちて信ず、故に言う、主イイススを復活せしめし者は、イ

イススを以て我等をも復活せしめ、且爾等と偕に己の前に立たしめんことを知るに因る。

蓋萬事は爾等の爲なり、豊かなる恩寵が、多くの人の感謝に由りて、神の光榮の

溢るるを致さん爲なり。

(比較用 口語訳) 「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負っている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである。わたしたち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されているのである。それはイエスのいのちが、わたしたちの死ぬべき肉體に現れるためである。こうして、死はわたしたちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのである。「わたしは信じた。それゆえに語った」としてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じている。それゆえに語るのである。それは、主イエスをよみがえらせたかたが、わたしたちをもイエスと共によみがえらせ、そして、あなたがたと共にみまえに立たせて下さることを、知っているからである。すべてのことは、あなたがたの益であって、恵みがますます多くの人に増し加わるにつれ、感謝が満ちあふれて、神の栄光となるのである。

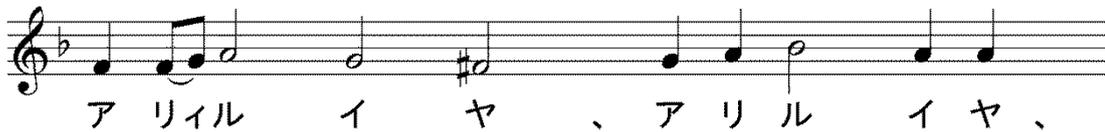
【 アリルイヤ 主日第6調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

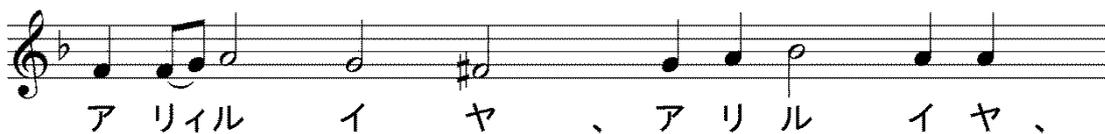
誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{しじょうしゃ おおい した おもの ぜんとうしゃ かげ した やす} 至上者の覆の下に居る者は、全能者の蔭の下に安んず、



誦經) ^{しゅ い なんぢ われ かくれが われ ふせぎ われ たの ところ われ かみ} 主に謂う、爾は我の避所、我の防禦、我が頼む所の我の神なりと、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いきぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を 施す 爾の神とに 光榮を 獻ず、今も何時も 世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書 92 端 22 章 35~46 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て 聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時一人の律法師彼を試みて、問いて曰えり、師よ、律法の中に
いづれ いましめ おおい これ い なんぢころ つく たましい つく おもい つく
何の 誠か 大なる。イイスス之に謂えり、爾心を盡し、靈を盡し、意を盡し
て、主 爾の神を愛せよ、此れ 誠の第一にして 大なる者なり。第二は是に同じき者、
すなわちなんぢ となり あい おのれ ごと こ ふたつ いましめ ことごと りつぼう よ
即 爾の 鄰を愛すること 己の如くせよ。斯の二の 誠には 悉くの律法と預
げんしゃ かか ら あつま とき これ と い なんぢら
言者と 繋れり。ファリセイ等の 集りし時、イイスス之に問いて曰えり、爾等ハリストス
の事を如何に 意うか、彼は 誰の子なるか。曰く、ダヴィドの子なり。彼曰く、然らば如何ぞ
ダヴィドは、聖神に由りて、彼を主と稱うる、云く、主我が主に謂えり、爾我が右に坐
して、我が 爾の敵を 爾の足の 凳と爲すに 迄れと。然らばダヴィド彼を主と稱うれば、
いかに かれ そのこ ひとり これ ことば こた あた こ ひ あえ またかれ と もの
如何ぞ彼は其子たる。一人も之に 言を答うる能わず、是の日より敢て復彼に問う者な
かりき。

(比較用 口語訳)

ひとりの律法学者が、イエスをためそうとして質問した、「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」。イエスは言われた、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛す

るようにあなたの隣り人を愛せよ』。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」。パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになった、「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」。彼らは「ダビデの子です」と答えた。イエスは言われた、「それではどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。すなわち『主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、わたしの右に座していなさい』。このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか」。イエスにひと言でも答える者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなった。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀3（金口イオアン）へ

重連禱に加えるコロナ終息とウクライナの平和の為の祈り

こ まち こ きょうかい およそ まち ぜんせかい えきびょう まんえん まも わ ぜん
此の都邑と此の 教 會、凡 の都邑と全世界とが疫 病 の蔓延より護られ、我が善に
ひと あい かみ じんじ あいれん た およ われら のぞ いかり とど そのわれら
して人を愛する神が仁慈と哀憐とを垂れて凡そ我等に臨む 怒 を遏め、其我等に
せま ぎ ばつ われら すく およ われら あわれ ため いの
逼る義なる罰より我等を救い、及び我等を 憐 むが爲に禱る、

また お たたかい よ そのいのち うしな もの ため しゅわれら かみ あわれみ
又ウクライナに於ける 戦 に因りて其生命を 失 いし者の爲、主我等の神が 憐
もつ かれら かえり やまい かなしみ おわり いのち ところ やす
を以て彼等を 顧 み、疾 も 悲 もなくして、終 なき生命のある 處 に安んぜしめ
ため しゅ いの
んが爲に主に禱らん、

また お たたかい よ くるしみ あ きず う うれ あるい うつ もの
又ウクライナに於ける 戦 に因りて 苦 に遇い、傷を受け、憂い、或 は徙されし者
じれん せいめい へいあん そうけん きうしょく たま ため いの
に慈憐、生命、平安、壮健、救 贖 を賜わんが爲に禱る、

また たい こうせん とど かしこ わぼく へいあん さか ため なんぢ いの
又ウクライナに対する攻 戦 を止め、彼處に和睦と平安との 榮えんが爲に 爾 に禱る、
き い あわれ
聆き納れて 憐 めよ、